

宮城県涌谷町日向館跡・中野遺跡の調査

相原 淳一（東北歴史博物館）・二瓶 雅司（涌谷町教育委員会）

1. はじめに	4. 考察
2. 涌谷町日向館跡出土遺物の調査	5. 付記
3. 涌谷町中野遺跡出土遺物の調査	6. おわりに

1. はじめに

2019年3月に当館研究紀要20に、アジア航測株式会社の千葉達朗氏が考案した航空レーザー測量技術に基づく赤色立体地図により、石巻市桃生城跡と涌谷町日向館跡の周辺を、従来までは難しかった広域的な視野から検討を行った。

本稿では、日向館跡の追加資料の紹介と、日向館跡の東方約2kmの中野遺跡出土瓦が酷似することが判明し、両遺跡の実物資料を突き合わせての比較検討、さらにその後の現地調査と2021年12月11日に涌谷公民館で行った有志による検討会を踏まえ、報告するものである。

本稿の第1・2、4・5章を相原淳一、第3章を二瓶雅司が分担し、相原が全体を編集した。

2. 涌谷町日向館跡出土遺物の調査

東北歴史博物館の考古分野では2008年度から宮城県大崎市から東松島市、石巻市にかけて8世紀を中心に設置された城柵官衙関連遺跡の外郭・防塁線を確認するための分布調査を行って来た。東日本大震災のため、2011年3月に予定した調査は中止となり、その成果をまとめる機会も失った。職員の異動や震災後の混乱のために所在不明となっていた2009年11月26日の最初の踏査資料を報告する。

(1) 遺跡の位置とこれまでの調査

日向館跡は、JR涌谷駅北東へ約1.1kmに位置する（図1-7）。遺跡は、涌谷町の中央に北西から南東に連なる筧岳丘陵の南端部にあり、神明社（元妙見宮、明治時代に改称）が鎮座している。日向館跡はこの標高45mの丘陵とその裾部に広がる。

丘陵の最も低い裾部では2014～15年に発掘調査で奈良・平安時代の4棟の掘立柱建物跡、区画施設（SA6～8材木堀跡・掘立柱列）、溝跡等が検出され、瓦・土壁・土師器・須恵器が出土（涌谷町教育委員会2016）している。主な遺構の年代は灰白色火山灰（To-a：915年頃）との関係から、降灰以前と考えられている。出土遺物には、非ロクロ調整土師器坏・須恵器甕・瓦の小片がある。

神明社が所在する頂部平場の発掘調査は行われていない。

(2) 2009年の東北歴史博物館による調査

日向館跡から北方約0.5kmには、2009・2010年に涌谷町教育委員会により発掘調査が行われた城山裏土塁跡（11）がある。この土塁状の高まりは東側では、八方谷遺跡（13）側に大きく折れ、南側に延びると考えられていた。西側は涌谷城ほか、中近世以降の削平・改変が著しいものの、コ字状に外郭施設が延びる可能性（佐々木1965）がある。



図1 遺跡の位置

この想定される外郭施設内部中央、すなわち日向館跡に照準を定めて、2009 年に分布調査を行った。

なお、妙見宮は涌谷館主亘理伊達家の鎮守で、妙見宮の東に塩釜神社、西に多賀神社が祀られており、涌谷伊達家入部以前の地主神（佐々木 1965）と考えられている。塩釜神社は天平年中に陸奥国から初めて黄金を献上した国守百済王敬福が産金を祈願して祀った塩釜神社の旧地（横山 1965）とも伝えられ、二社ともに天平 18 年以前に遡るとみられる小田軍団設置と深く関わる（佐々木 1965）とされる。

2009 年 11 月の分布調査は神明社がある標高約 45m の頂部平場で行った。この平場は「妙見宮縁起」によると、1696（元禄 9）年秋に伊達安芸宗元・村元親子が十丈の山嶺を削って、妙見宮の社壇を構えたとされ、すでに大きく削平を受けている。

(3) 発見された遺物

境内の多賀神社と社務所付近で、新しい瓦破片^(註)に混じって、古瓦などの遺物（図 3）が採集された。

1 は平瓦、凸面は格子目叩き、凹面は布目痕を残す。格子目は 1 辺の長さが $8 \times 8\text{mm}$ の正格子目である。凹面は約 $6 \sim 7\text{mm}$ 幅の竹状模骨痕の凸凹を密に残している。端面は光沢を帯びる。

2 は平瓦、凸面は格子目叩き、凹面は布目痕を残す。格子目は 1 辺の長さが $12 \times 12\text{mm}$ の大型の正格子目である。凹面には $7 \sim 8\text{mm}$ 幅の竹状模骨痕の凹凸を残している。側端部はヘラケズリによる面取りが施され、3 面から構成されている。1・2

の焼成・色調は類似している。

3 は平瓦、凸面は文様叩き、凹面には布目痕を残す。叩き目の重複のため、判然としないが、文様は平行線に斜位直線を配したものと直交方向に配したものの 2 種が併用されているようである。凹面の模骨痕は幅 6mm 程の平板状を呈している。破断面には粘土板合せ目痕跡が残されており、粘土板巻作りである。色調は灰白色である。

4 は平瓦、凸面は縄叩き目、凹面には布目痕、わずかに糸切り痕を残している。側端部はヘラケズリによる面取りが施され、3 面から構成されている。色調は灰オリーブ色である。割口の色調を見ると、灰オリーブ色の内側には赤変部が広がっており、凸面側の方が赤変部が厚く、被熱の痕跡を残している。

5 はかわらけ小皿の小片である。

(4) 前回報告資料との比較検討

2019 年に報告した瓦と比較する。前回資料は境内周りの参道石段や西側木立のものが含まれ、より広範に遺物の分布調査を行っている。

前回採集した瓦は丸瓦（凸面：平行叩き目、縄叩き目→スリ消し）、平瓦（凸面：平行叩き目、縄叩き目）である。このうち、平行叩き目の丸瓦は幅狭の蒲鉾状を呈する凸型調整台を製作に用いたものであり、大崎市下伊場野窯跡や東松島市亀岡遺跡に類例があり、多賀城創建の初期段階に相当する。下伊場野窯瓦は、系統的には 7 世紀末から 8 世紀初頭の大蓮寺窯瓦の影響を強く受けて製作されたと考えられて



① 神明社（妙見宮）拝殿（南から） 涌谷館主涌谷伊達鎮守妙見宮の右側に塩釜神社、左側に多賀神社が祀られている。



② 多賀神社（北から） 合祀された多賀神社や社務所付近で古代瓦などの遺物が採集された。

写真 日向館跡の神明社（妙見宮）境内

いる（宮城県多賀城跡研究所 1994）。また、下伊場野窯跡からは「小田郡□子部建万呂」のへう書瓦も出土しており、その関連性も考えられよう。黄金山産金遺跡から出土する瓦は「すべて縄叩き」（伊東 1960）とされており、明らかにそれよりは古い瓦が発見されたことになる。

今回、報告の瓦のうち大小の正格子目が施され、内面に竹状模骨痕を残す平瓦は、前回報告資料中には含まれない。文様叩き目瓦とともに、後述する。

縄叩き目を残す瓦は、前回・今回報告資料ともに、赤変しており、被熱の痕跡を残している。

3. 涌谷町中野遺跡出土遺物の調査

(1) 資料来歴と経過

2005 年に、長年にわたり涌谷町教育委員会文化財保護委員を務められた佐々木茂楨氏の収拾資料が涌谷町に寄贈された。その中に、今回報告する中野

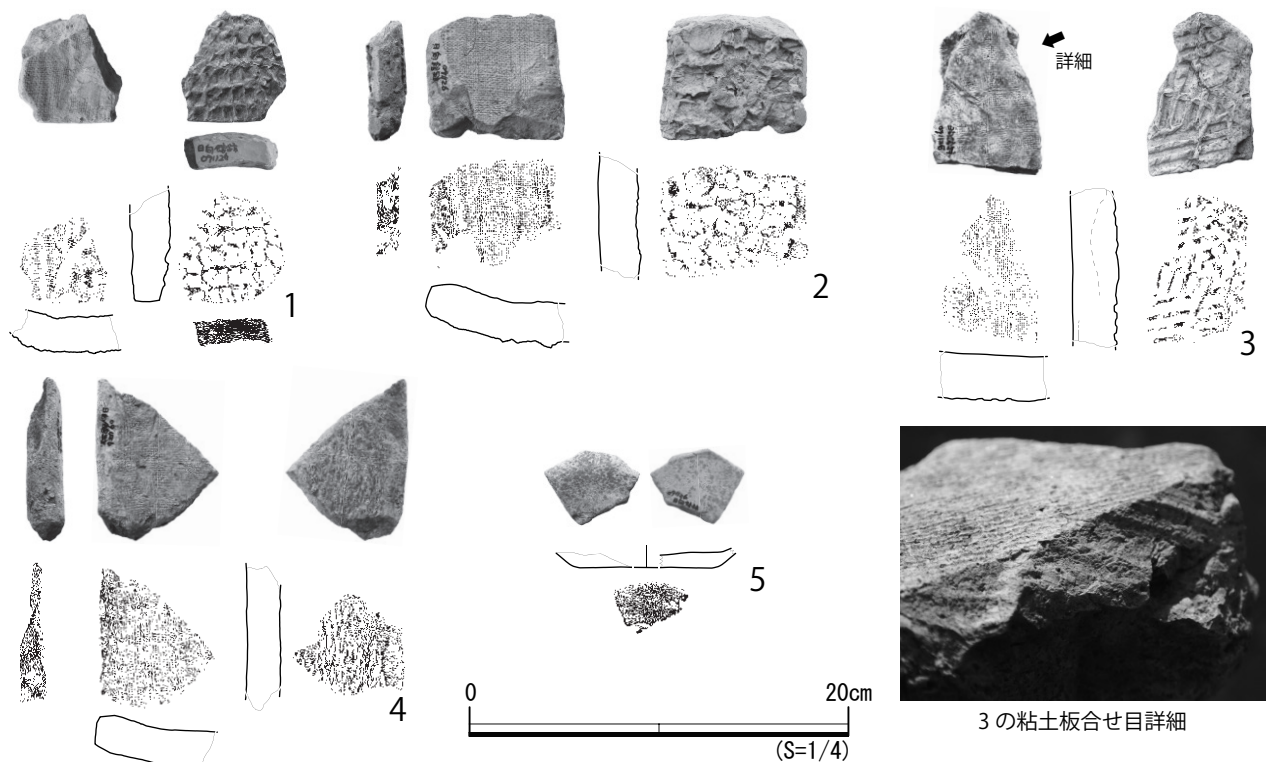
遺跡出土瓦がある。

遺跡地は昭和 40 年代までは畑地であり、「畑の耕作時によく瓦片を採集した」という地権者からの聞き書きが埋蔵文化財パトール時の調査カード（2004（平成 16）年 12 月 15 日／調査員：佐々木茂楨・福山宗志）に残されている。図 3-1・4・7 の瓦は佐々木茂楨が 1968（昭和 43）年 12 月 8 日に採集したものである旨が同カード裏面には記されている。

2016 年 8 月 6 日には、涌谷町内出土古瓦の共同調査が島根大学教授大橋泰夫氏・南相馬市教育委員会藤木海氏・東松島市教育委員会佐藤敏幸氏・大崎市教育委員会大久保弥生氏・石巻市教育委員会佐藤佳奈氏によって行われた。この会において竹状模骨痕を残す瓦は、多賀城以前の陸奥国府と考えられる仙台郡山遺跡に類例があることが指摘された。

(2) 遺跡の位置と現況

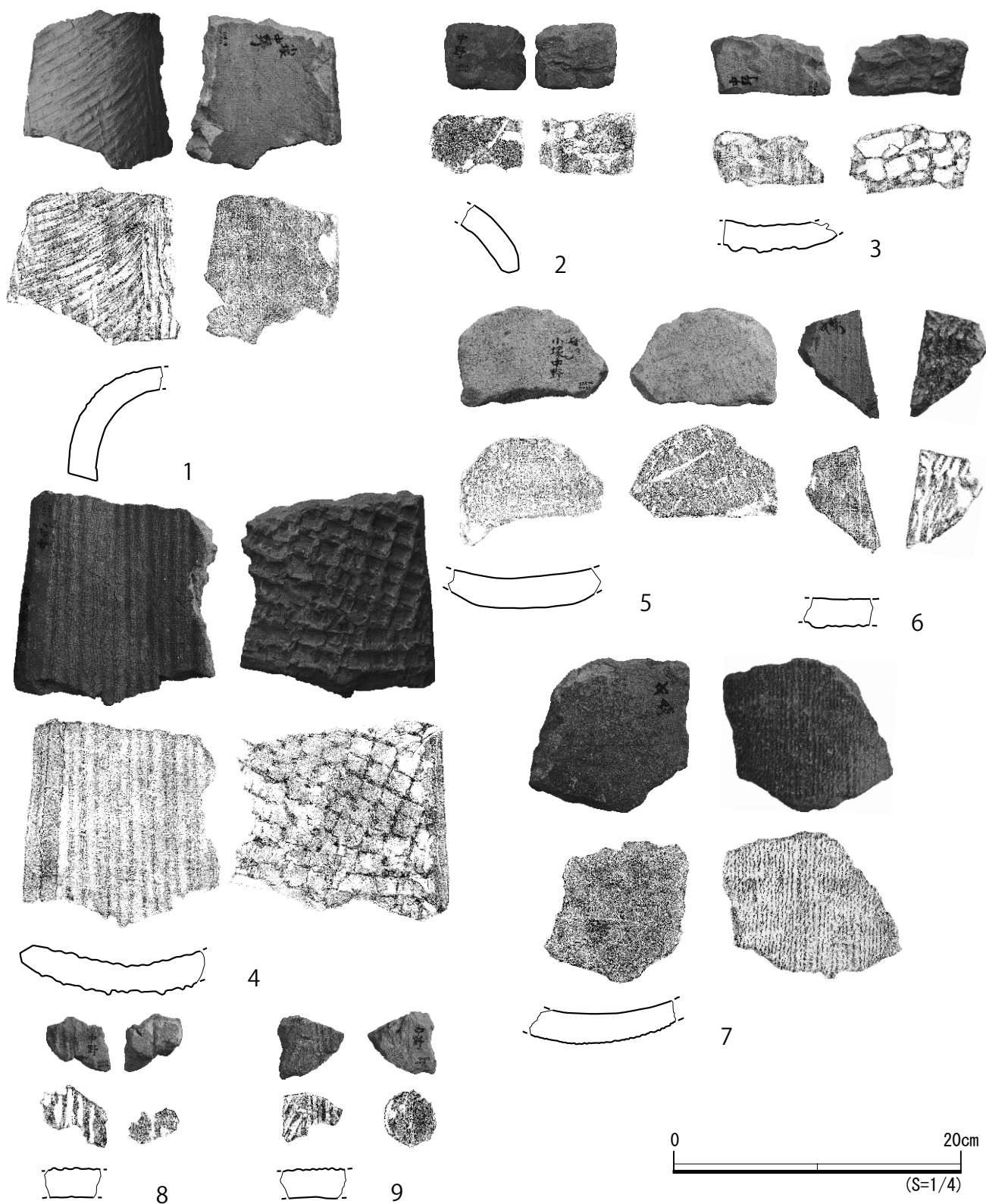
中野遺跡は涌谷町小塚字中野二に所在し、標高



番号	種別	器形	調整		製作方法	色調		含有物	残存
			凸面	凹面		凸面	凹面		
1	瓦	平瓦	格子叩き目	竹状模骨痕・布目痕	粘土板巻作り	暗紫灰色 (5RP4/1)	暗紫灰色 (5P4/1)	白色砂粒	小片
2	瓦	平瓦	格子叩き目	竹状模骨痕・布目痕	粘土板巻作り	明オリーブ灰色 (5GY7/1)	オリーブ灰色 (5GY6/1)	白色砂粒	小片
3	瓦	平瓦	文様叩き目?	模骨痕・布目痕	粘土板巻作り	灰白色 (N8/0)	灰白色 (5Y8/1)	白色砂粒	小片
4	瓦	平瓦	縄叩き目	布目痕	粘土板巻作り	灰オリーブ色 (5Y6/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	白色砂粒	小片

番号	種別	器形	調整		製作方法	色調		含有物	残存
			外面	内面		外面	内面		
5	かわらけ	小皿	底面：回転糸切	コテナデ	ロクロ	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR7/6)	砂粒	小片

図 2 日向館跡から発見された遺物



番号	種別	器形	調整		製作方法	色調		含有物	残存
			凸面	凹面		凸面	凹面		
1	瓦	丸瓦	平行叩き	糸切痕・布目痕	粘土板巻作り	黄灰色 (2.5Y6/1)	黄灰色 (2.5Y6/1)	白色砂粒	小片
2	瓦	丸瓦	ナデ	布目痕	粘土紐巻作り	灰色 (5Y5/1)	灰色 (5Y5/1)	白色砂粒	小片
3	瓦	平瓦	格子叩き	竹状模骨痕・布目痕	—	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	灰黄色 (2.5Y6/2)	石英	小片
4	瓦	平瓦	格子叩き	竹状模骨痕・布目痕	—	黄灰色 (2.5Y5/1)	黄灰色 (2.5Y5/1)	白色砂粒	小片
5	瓦	平瓦	平行叩き→ナデ	布目痕	—	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	石英	小片
6	瓦	平瓦	平行叩き	布目痕	—	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	灰黄色 (2.5Y6/2)	白色砂粒	小片
7	瓦	平瓦	縄叩き	ナデ	—	灰色 (N4/)	灰色 (N4/)	白色砂粒	小片
8	瓦	不明	平行叩き	布目痕	—	灰色 (5Y5/1)	灰黄色 (2.5Y6/2)	白色砂粒	小片
9	瓦	不明	平行叩き	布目痕	—	黄灰色 (2.5Y6/1)	黄灰色 (2.5Y6/1)	—	小片

図3 中野遺跡出土遺物

42 mの丘陵上に立地する（図1-17）。日向館跡と中野遺跡の間には、追戸・中野横穴墓群が広がる。

現在は杉林となっており、地権者の案内により、かつて瓦が出たという箇所のボーリングを行ってみたが、焼土や炭化物も含め、何も確認することはできなかった。相原は赤色立体地図による調査も行ったが、小平場が広がるのみで人工的な地形の改変と認められる箇所は確認できなかった。

（3）発見された遺物

寄贈された資料（図3）は10点である。丸瓦・平瓦が7点、不明な瓦が2点、須恵器が1点である。

丸瓦は2種ある。1は粘土板巻作りで、凸面が平行叩き、凹面が糸切痕と布目痕である。2は粘土紐巻きかと思われる作りで、凸面がナデにより叩き痕跡は不明、凹面が布目痕である。

平瓦は桶巻き、一枚作りか不明であるが、叩き目などの状況により4種ある。3・4は凸面が格子叩き、凹面が竹状模骨痕と布目痕とみられるものである。5は、凸面を平行叩き後にナデ、凹面が布目痕である。6は、凸面を平行叩き、凹面が布目痕である。7は、凸面は縄叩き目、凹面が布目痕である。

この他、8・9は凸面が平行叩き、凹面が布目痕の瓦片であるが、小片のため丸瓦か平瓦か確定しえない。

その他、須恵器甕（外面：平行叩き→ナデ、内面：ナデ）の小片がある。

4. 考察

平行叩きの丸瓦は、日向館跡・中野遺跡ともに幅狭の蒲鉾状を呈する凸型調整台を製作に用いたものであり、側端部の調整はヘラケズリ1回のみで、面取りは行われていない。瓦の厚さや色調・胎土ともに似ており、同じ窯で焼かれた製品の可能性がある。大崎市下伊場野窯跡や東松島市亀岡遺跡に類例があり、多賀城創建の初期段階に相当する。

正格子目叩きの平瓦はいずれも竹状模骨痕を残している。大型の正格子目の叩きを残す平瓦が日向館跡・中野遺跡の両方から採集されており、瓦の厚さや色調・胎土ともに似ており、同じ窯で焼かれた製品の可能性がある。側端部は再調整が行われている。

現在、このような平瓦を出土する瓦窯は県内では未発見である。類似する瓦は仙台郡山遺跡（仙台市教育委員会2005）から出土している（図4）。いずれも多賀城以前の陸奥国府とされる方四町Ⅱ期官衙内南東部からの出土である。

図4-1（G75-1）は第5土壌から出土した。8号建物跡（東西棟N-6°-E）と9号建物跡（南北棟N-3°-E）は、新旧不明である。瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦である。凸面にわずかに格子目叩きの痕跡を残し、凹面には竹状模骨痕を残している。2（G-111）はSI1975 竪穴住居跡1層からの出土である。凸面格子目叩き、凹面に竹状模骨痕を残している。北カマドの向きがN-3°-Eとほぼ真北方向であることから、Ⅱ期官衙の時期とされている。さらに東カマドのSI1980がSI1975を切る。3・4は攪乱からの出土である。

凹面に竹状模骨痕を残す凸面格子目叩きの平瓦は仙台郡山Ⅱ期官衙の時期（7世紀末葉～8世紀初頭）の多賀城創建以前の年代が考えられる。

文様叩きの平瓦は名生館官衙遺跡や伏見廃寺跡から出土しているが、ともに放射状をなす花文であり異なる。日向館跡の文様は平行叩きの変異形とみられるが、類例は不明である。仙台郡山遺跡にも類例はない（及川2021）。

以上、コ字状の外郭施設に囲まれた日向館跡は、採集された瓦から仙台郡山Ⅱ期官衙の時期に創建された城柵官衙遺跡の可能性が考えられる。また、一般集落から瓦は出土しないことから、中野遺跡はその附属寺院など関連施設と考えられよう。

今後さらに精緻な分布調査や発掘調査による検討が待たれる。

5. 付記

2021年10月18日に行った中野遺跡の調査にあわせて、前回確認された愛宕神社付近の土塁状の高まりの間のボーリング調査も行っている。結果はいずれも表土直下に溝などを確認することはできなかった。その後、宮司の一條明美氏から氏子の伝承として愛宕山神社から新山速玉雄神社を抜け、簗岳山簗峯寺に至る参詣路（図1）があった旨を伺った。

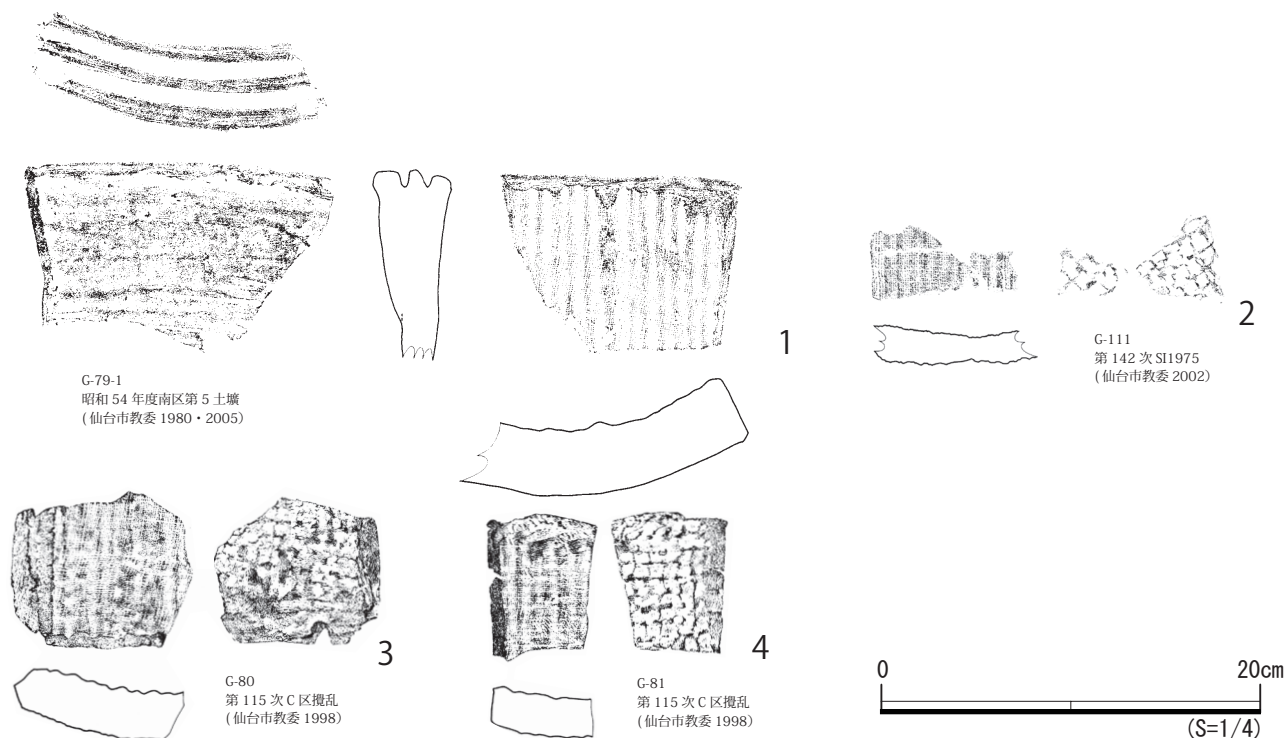


図4 仙台郡山遺跡の竹状模骨痕の残る平瓦

篋岳丘陵を東に延びる尾根筋には、加護山国家安楽寺跡や土塁状の高まりなどが分布し、人工的な改変が加えられている。東山遺跡・城生遺跡・新田柵跡の外側で発見された防塁施設の延長の可能性も考えられ、今後の発掘調査に期待したい。

6. おわりに

本稿を草するにあたり、仙台市教育委員会・黄金山神社・宮城県多賀城跡調査研究所、特に及川謙作氏・車田敦氏、大橋泰夫氏・藤木海氏・佐藤敏幸氏・大久保弥生氏・佐藤佳奈氏からは、特段のご教授を賜った。記して、謝意をするものである。

【註】 前回報告した図 11-9 は、近現代瓦であることが判明した。お詫びして、訂正する。

【引用参考文献】

- 相原淳一・谷口宏充・千葉達朗 2019「赤色立体地図・空撮写真からみた城柵官衙遺跡」『東北歴史博物館研究紀要』20
- 伊東信雄 1960『天平産金遺跡』涌谷町・黄金山神社
- 及川謙作 2021「陸奥国国府における造瓦技術の受容と変遷(1)」『宮城考古学』23
- 佐々木茂楨 1965「古代史」『涌谷町史』上巻
- 仙台市教育委員会 1980『年報1』第23集
- 仙台市教育委員会 1998『郡山遺跡18』第227集
- 仙台市教育委員会 2002『郡山遺跡22』第258集
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編—』第283集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『下伊場野窯跡群』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19集
- 横山秀哉 1965「涌谷妙見宮の建築」『涌谷町史』上巻
- 涌谷町教育委員会 2016「日向館跡・城山裏土塁跡ほか」『第42回古代城柵官衙遺跡検討会資料』



図5 日向館跡と同時代の遺跡